



【広告】 7月21日(金)SAPビジネス・シンポジウム'06 ジェフリー・ムーア来日講演決定

【広告】 第2回『内部統制とITフォーラム』講演内容をWebで好評公開中!! 主催:日経

【広告】 ◆オープン化粧品◆業務システム連携で在庫と物流コストが約30%減-富士通

【広告】 [特集]世界をリードする心臓・血管医療 提供 東芝

ビジネス: ネット時評(日経デジタルコアより)

更新:2月1日 13:56

IT三冠王アメリカの危機(中村伊知哉)

90年代はアメリカの一人勝ちだった。デジタル分野では、コンピューターもネットワークもコンテンツもぶっちぎりの三冠王だった。これは企業が果敢にITを導入していったことが主要因だが、その背景には、政府による知的競争力政策がある。



■多様性が生んだIT革命

80年代、共和党政権は、ハイテク日本の脅威を受け、技術開発の推進、知的財産権の保護、ベンチャー育成を柱とする総合政策を推進した。それが90年代のクリントン政権に至り、その規制緩和やインターネット推進政策ともあいまって、いわゆるIT革命として開花したわけだ。

アメリカの特性を一言で表せば、多様性である。戦術も信条もバラバラなセクターがせめぎあうダイナミズムがアメリカの力の源泉だ。ところが、俯瞰すると、あたかも統一された単純な戦略に従っているかに見えるところもまたアメリカの特徴だ。90年代のデジタルへのシフトは、国がまるごとデジタル教に洗脳されたかのような様相であった。

しかしこの一貫した行進は、無血革命だったわけではない。ずいぶん苦痛を伴う選択でもあった。ネットの導入は、効率化と、競争の激化と、新興企業の台頭をもたらす。それは同時に、リストラや倒産、既得権の消失を伴う。それを避けずに経済の構造を改革し、国ぜんたいの競争力を回復したのだ。

■危ないのは日本よりアメリカ

一方、日本は80年代までの勝ち体験が強すぎたあまり、様子がおかしくなっても飲み心地のいい薬で散らそうとして、体力を減らした。そこで今またアメリカに学ぼうとITの導入を急いでいるわけだが、日本が学ぶべきは、アメリカのネット事情よりむしろ、血を流しても体質を改善しようとする気合いであろう。

それにしても勝ち体験は恐ろしい。三冠王アメリカとて万全ではない。いや、2000年代を展望すると、危ないのは日本よりもアメリカではないか。その危機はもう露呈しているのに、勝ち体験のあまり、その危機を体感していないのではないか。という気がする。

たとえばコンピューター。80年代の終わり、アメリカは、コンピューターとテレビと電話の機能を合体して、マルチメディアなる万能機を生んだ。PCやインターネット端末と呼ばれていま私たちの机の上やヒザの上で働いている。

しかし次にコンピューターはバラバラにされようとしている。ケータイは最も身近なコンピューターとして定着する。オモチャのロボットは高機能チップで制御されている。クルマは走るコンピューターであり、冷蔵庫は白物インターネット端末となった。服や靴もチップで埋め尽くされる。それら全てがオンラインでつながり、社会全体が巨大なコンピューター

ター空間と化していく。

■問われるインフラ観

このユビキタス環境を達成するために、まずはコンピューターを薄く軽く小さく小さくすることと、壊れにくく安くすることが必要だ。改良である。日本のお家芸だ。反面、アメリカは栄光の90年代をもたらしたパソコンを躊躇なく解体していけるのか。

ネットワークはどうか。世界のインターネットを先導してきたのはアメリカである。CATVやADSLによるブロードバンドを先駆けて実用化したのもアメリカである。しかし、電話料金が定額制のアメリカで、追加料金を払ってでも高速利用したいという層は薄い。現にブロードバンド利用比では韓国に抜かれ、今後、他国にも追いつかれていくのではないか。

しかもそれらは銅線の効率利用であって、せいぜい座って数メガ級が使えるようになる段階の話だ。問題はその後。日本では、移動しながらメガ級のネットを利用したり、光ファイバーでテレビ画像をジャブジャブに流したりするインフラ環境がよいよ現実の像を結び始めた。しかしアメリカは全く展望が描けないでいる。

移動通信のネット利用さえ本格普及していないアメリカは、次世代携帯の展開が不透明なままだ。また、幹線系の光ファイバー化は進んでいるが、各家庭に光ファイバーを敷設しようとする動きは弱く、誰でもギガビットという環境は当分望めない。

アメリカ的な市場主義からすれば、短期収益が不確実な光ファイバーへの投資ドライブがかからないのは合理的である。だが合理的でないことを求められるものをインフラと呼ぶ。このままではアメリカはネット後進国になる可能性さえある。アメリカのインフラ観が問われる。

そしてコンテンツだ。確かに世界の映像はハリウッドが席卷した。ウェブの表現はアメリカが制した。この力は当分続く。認めよう。しかし、あくまでこれはプロのビジネスの領域だ。これからの課題はピア・ツー・ピアでの表現である。大衆の表現力の技量と厚みが問題となってくる。

この点、いい年をした大人がマンガをむさぼり読み、子供はゲームに興じるという国民訓練を積んでいる日本は基礎体力がある。誰もが手書きのマンガ表現ができる特殊な国だ。いま日本の本当の強みはここにある。この大衆の創造力の点で、アメリカが勝てる保証はない。

いったいアメリカは大丈夫だろうか。

-筆者紹介-

中村 伊知哉(なかむら いちや)
スタンフォード日本センター研究所長



略歴

1961年生まれ、京都市出身。京都大学経済学部卒。在学中はロックバンド“少年ナイフ”のディレクターなどを務める。84年郵政省入省。電気通信局、放送行政局、登別郵便局長を経て、通信政策局でマルチメディア政策、インターネット政策を推進。93年からパリに駐在し、95年に帰国後は官房総務課で規制緩和、省庁再編に従事。98年郵政省を退官し、(株)CSK特別顧問に就くとともに渡米、MITメデ

イアラボ客員教授に就任。2002年9月から現職を兼務。経済産業研究所
コンサルティングフェロー、(社)音楽制作者連盟顧問、NPO「CANVAS」
副理事長を兼務。著書に『インターネット,自由を我等に』(アスキー出版
局)、『デジタルのおもちゃ箱』(NTT出版)など。

● 記事一覧

- 労働力不足とロボット社会(築地達郎)
- 通信市場の「ジレンマ」——光ファイバー普及、市場集中を誘発(今川拓郎)
- メディア融合時代における「競争」と「公益」の調和・竹中懇最終報告に寄せて(金正勲)
- IT人材不足を解消するためにすべきことは何か(前川徹)
- 利用者の視点からコンテンツ活性化を考える(大木登志枝)
- 「ネットで働ける」社会は本当に来るのか?(田澤由利)
- 携帯電話の「自己触媒的」発達・グローバル市場で強みとなるか(土屋大洋)
- 産業と融合する通信インフラ——ネットワーク社会の新たなアーキテクチャーとは(荒野高志)
- ネットワークは中立的か?——日米の議論の潮流を読む(谷脇 康彦)
- MVNOの第2ステージが始まった(本荘修二)
- 個人情報保護法から1年で見えてきたこと(高木 寛)
- 知らずにインストールされる「アドウェア」(帆場英次)
- ユビキタス、センシング&コンテクスト化のインパクト(碓井聡子)
- 通信・放送融合 タブー廃しチャンスに変えよ(中村伊知哉)
- これでいいんかい、国の委員会<その6>(関根 千佳)
- 少子高齢化時代のICT利活用への期待(片瀬 和子)
- 「Web 2.0」はバズワードか?(湯川 抗)
- 本当にユビキタスな情報社会へ向けて(土屋大洋)
- 個人情報保護法と暗号(内田勝也)
- 到来した「超」カスタマー・セントリックな時代(江川 央)

 ヤマトシステム開発
物流と決済

NIKKEI NET

新製品

- | | | |
|-----------------------------|--------------------------------|--------------------------------|
| ■ パソコン関連 | ■ ソフト&サービス | ■ 自動車 |
| ■ AV&通信 | ■ 生活 | ■ ホビー&レジャー |

(C) 2006 Nihon Keizai Shimbun, Inc. All rights reserved.